

芸術(書道)

1 研究テーマ

(1) 研究テーマ

書の見方・考え方を養う鑑賞の授業～線を糸口として、書的美しさ・良さを捉える～

(2) 研究のねらい

「漢字の書」の鑑賞を通して、生徒が書作品を多角的に捉え、書の見方・考え方を育むことを目的とした。特に、複数の書家の作品を比較することで、書における線の表現が多様であることを理解させた。そのために、「指導と評価の一体化」の視点を踏まえ、鑑賞で得た学びを再制作の構想に生かす過程を評価することで、生徒が自らの学びを振り返り、さらなる探究へと向かう姿勢を育むことができる授業実践を研究した。

2 実践事例

(1) 単元の指導と評価の計画

ア 科目名：「書道Ⅰ」

イ 単元名：漢字の書

ウ 単元の目標：

【A 表現】

- ・用筆・運筆から生み出される書の表現性とその表現効果との関わりについて理解する。【知識】
- ・作品を効果的に表現するための基礎的な用筆・運筆を身に付ける。【技能】
- ・表現の意図に基づいた線の太さ、墨色、用筆・運筆、全体の構成について構想し工夫する。【思考力、判断力、表現力等】
- ・自身の意図に基づく表現、一字書の表現の学習活動に主体的に取り組み、書に対する感性を豊かにし、書を愛好する心情を養う。【学びに向かう力、人間性等】

【B 鑑賞】

- ・線質の表現効果や風趣との関わりについて理解する。【知識】
- ・書作品の価値とその根拠について考え、書のよさや美しさを味わって捉える。【思考力、判断力、表現力等】
- ・書の美や風趣を味わい、作品や線の価値とその根拠について考えながら、鑑賞の学習活動に主体的に取り組みようとする。【学びに向かう力、人間性等】

エ 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
【共通事項】 ア 用筆・運筆から生み出される書の表現性とその表現効果との関わりについて理解している。 【A 表現】 ①作品を効果的に表現するための基礎的な用筆・運筆を身に付けている。(技能) 【B 鑑賞】 ②線質の表現効果や風趣との関わりについて理解している。	【A 表現】 ①表現の意図に基づいた線の太さ、墨色、用筆・運筆、全体の構成について構想し工夫している。 【B 鑑賞】 ②書作品の価値とその根拠について考え、書のよさや美しさを味わって捉えている。	【A 表現】 ①自身の意図に基づく表現、一字書の表現の学習活動に主体的に取り組もうとしている。 【B 鑑賞】 ②書の美や風趣を味わい、作品や線の価値とその根拠について考えながら、鑑賞の学習活動に主体的に取り組もうとしている。

オ 単元の指導と評価の計画 ○「記録に残す評価」

次	時	学習活動	知	思	態	評価のポイント・指導上のポイント
1	1 ・ 2 (本時)	<p>○手島右卿「崩壊」を鑑賞する。 ロイロノートに記入して共有する。 作品の印象やイメージを特に線の表現に着目し鑑賞をする。</p> <p>○単元全体の学習内容を確認する。</p> <p>○書作品(二字書)を鑑賞する。 【鑑賞方法】</p> <p>○4人で班を作り担当作品を鑑賞する。</p> <p>①個人で印象についてロイロノートの付箋に記入させ、その根拠となる分析項目について考え付箋を貼らせる。</p> <p>②班で各自が出した意見を共有する。 (鑑賞作品)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・松井如流「円通」 ・上條信山「堅勁」 ・戸田提山「靈機」 ・手島右卿「愚直」 <p>(分析項目)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・線の太さ ・墨色 ・線のスピード(用筆・運筆) ・線のかすれ、にじみ <p>③班の代表者が担当の作品について全体に発表する。(印象とその根拠)</p> <p>○本時の振り返り(気付いたこと、学んだこと)をワークシートに記入する。</p> <p>○次回以降の学習活動について理解する。</p>	○鑑		○鑑	<p>【指導上のポイント】 書を構成する線質・字形・構成等の要素の中から、線質に着目した鑑賞ができるよう説明する。</p> <p>【態②：評価のポイント】 ロイロノートからグループでの対話を見取り、書の美や風趣を味わい、作品や線の価値とその根拠について考えながら、鑑賞の学習活動に主体的に取り組もうとしているかを見取る。</p> <p>【指導上のポイント】 鑑賞を言語化する際の補助となるような形容詞の一覧を準備しておく。鑑賞の進捗を随時確認し、鑑賞が進んでいない生徒には一覧を提示し個別に支援を行う。</p> <p>【指導上のポイント】 生徒が根拠を示せるように教員が追質問をする。</p> <p>【知②：評価のポイント】 ワークシートから線質の表現効果や風趣との関わりについて理解しているかを見取る。</p>
2	3 ・ 4	<p>○前時の内容をロイロノート、ワークシートで振り返る。</p> <p>○様々な用筆・運筆、墨色を学ぶ。</p> <p>○4月に制作した自身の一字書「自分を表現」をロイロノートで確認し、前時の鑑賞活動で得た学びを生かし、自分の作品に込めるイメージがより効果的に伝わるよう再制作の構想を立てる。</p> <p>【再制作の流れ】</p> <p>①自分の作品を鑑賞し、改めて表現したいイメージをロイロノートにまとめる。</p>			○表	<p>【思①：評価のポイント】 ロイロノートの再制作の構想から、表現の意図に基づいた線の太さ、墨色、用筆・運筆、全体の構成について構想し、工夫しているかを見取る。</p>

		②鑑賞の学びを生かして線をどのように表現したいかを考え、具体的な構想をロイロノート(ピンクの付箋)に記入する。				
3	5 ・ 6	○前時の内容をロイロノートで振り返る。 【再制作の流れ】 ①再制作の構想に基づき、線の表現を意識しながら練習する。 ②制作するにあたっての変更点やより具体的な構想をロイロノート(青の付箋)に記入する。 ○再制作の清書を完成させる。	○技		○表	【態①：評価のポイント】 再制作の構想から清書に至るまでの過程において、粘り強く自らの表現を追求しようとしているかを見取る。 【技①：評価のポイント】 完成した作品から作品を効果的に表現するための基礎的な用筆・運筆を身に付けているかを見取る。
4	7 ・ 8	○発表シートをロイロノートで作成する。 ○完成した作品を相互鑑賞する。 【鑑賞の方法】 ①グループになり他者の作品について、作品の印象とその根拠をロイロノートの付箋に入力し、伝え合う。 ②全体で自身の作品について、発表シートを用い発表する。 ○ロイロノートに振り返りを記入する。	○表 ○表		○鑑	【共通事項ア：評価のポイント】 発表シートから用筆・運筆から生み出される書の表現性とその表現効果との関わりについて理解しているかを見取る。 【共通事項ア：評価のポイント】 発表シートと発表内容から用筆・運筆から生み出される書の表現性とその表現効果との関わりについて理解しているかを見取る。 【思②：評価のポイント】 他者の作品鑑賞や振り返りから作品の価値(美しさ、風趣)とその根拠(線質、構成)について、自分の考えをまとめ、表現しているかを見取る。

カ 授業実践例 (1・2時間目/8時間)

学習活動	評価のポイント・指導上のポイント
<p>○手島右卿「崩壊」を鑑賞する。 ロイロノートに記入して共有する。 作品の印象やイメージを特に線の表現に着目し鑑賞をする。</p> <p>○単元全体の学習内容を確認する。</p> <p>○書作品(二字書)を鑑賞する。</p> <p>【鑑賞方法】 4人で班を作り担当作品を鑑賞する。</p> <p>①個人で印象についてロイロノートの付箋に入力させ、その根拠となる分析項目について考え、付箋に貼る。</p>	<p>【指導上のポイント】 書を構成する線質・字形・構成等の要</p>

<p>②班で各自が出した意見を共有する。 (鑑賞作品)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・松井如流「円通」 ・上條信山「堅勁」 ・戸田提山「靈機」 ・手島右卿「愚直」 <p>(分析項目)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・線の太さ ・墨色 ・線のスピード(用筆・運筆) ・線のかすれ、にじみ <p>②班の代表者が担当の作品について全体に発表する。(印象とその根拠)</p> <p>○本時の振り返り(気付いたこと、学んだこと)をワークシートに記入する。</p> <p>○次回以降の学習活動について理解する。</p>	<p>素の中から、線質に着目した鑑賞ができるよう説明する。</p> <p>【態②：評価のポイント】 ロイロノートからグループでの対話を見取り、書の美や風趣を味わい、作品や線の価値とその根拠について考えながら、鑑賞の学習活動に主体的に取り組もうとしているかを見取る。</p> <p>【指導上のポイント】 鑑賞を言語化する際の補助となるような形容詞の一覧を準備しておく。鑑賞の進捗を随時確認し、鑑賞が進んでいない生徒には一覧を提示し個別に支援を行う。</p> <p>【指導上のポイント】 生徒が根拠を示せるように教員が追質問をする。</p> <p>【知②：評価のポイント】 ワークシートから線質の表現効果や風趣との関わりについて理解しているか見取る。</p>
--	---

研究実施校：神奈川県立金沢総合高等学校
実施日：令和7年10月16日(木)
授業担当者：安達 未来 教諭

(2)「指導と評価の一体化」の実現に向けたポイント

ア 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導の工夫

本研究では、「生徒が書作品を多角的に捉え、書の見方・考え方を育むことができる授業づくり」を目指すことを主たるねらいとしている。「指導と評価の一体化」の視点を踏まえ、鑑賞で得た学びを創作作品の構想に生かす過程を評価することで、生徒が自らの学びを振り返り、よりよい表現を実現できる自己調整能力の向上を図った。

このようなねらいを設定した背景として次の2点が挙げられる。1点目は「鑑賞」が次期指導要領でさらに重きが置かれると予想されることである。2点目は授業内で創作作品の制作に十分な時間をかけることが困難だということである。このことは県高等学校教育書道コンクールにおける創作作品の出品数が臨書作品に比べ少ないことから見て取れる。そこで、ICTを活用し他者の意見や取組を共有しながら作品の見方・考え方を広げ、鑑賞を通して自ら目指す表現を見いだす鑑賞活動と表現活動の円滑な接続を図る授業研究を計画した。

以下、公開研究授業にあたる1・2時間目を中心に工夫点とその結果について述べる。

(ア) 鑑賞活動を主とした授業展開

本研究テーマは「書の見方・考え方を養う鑑賞の授業～線を糸口として、書の美しさ・良さを捉える」である。書を構成する要素の中から、本研究は線を糸口とした鑑賞であるため、生徒の見るポイントを線に絞ることができるよう、1・2時間目では、「書作品から受けた印象の根拠を線の表現に着目して考えることができる」を目標とし鑑賞活動を行った。本単元の鑑賞活動ではスムーズに鑑賞活動が行えるよう①～③のように鑑賞のルールを設定した。

- ルール① 作品の印象について根拠を明らかにし、説明する。
- ルール② 線に着目する。
- ルール③ 線の太さ、墨色、線のスピード、かすれ・にじみを分析項目とする。

これらの視点を踏まえ、以下の展開で鑑賞活動を行った。まず、導入の鑑賞作品として手島右卿の「崩壊」を取り上げた。ロイロノートの共有ノートを活用し、**ルール①**作品の印象や雰囲気、その根拠を個人で考え付箋に記入させた(図1)。また、図1より生徒の記述の一部を表1に示す。

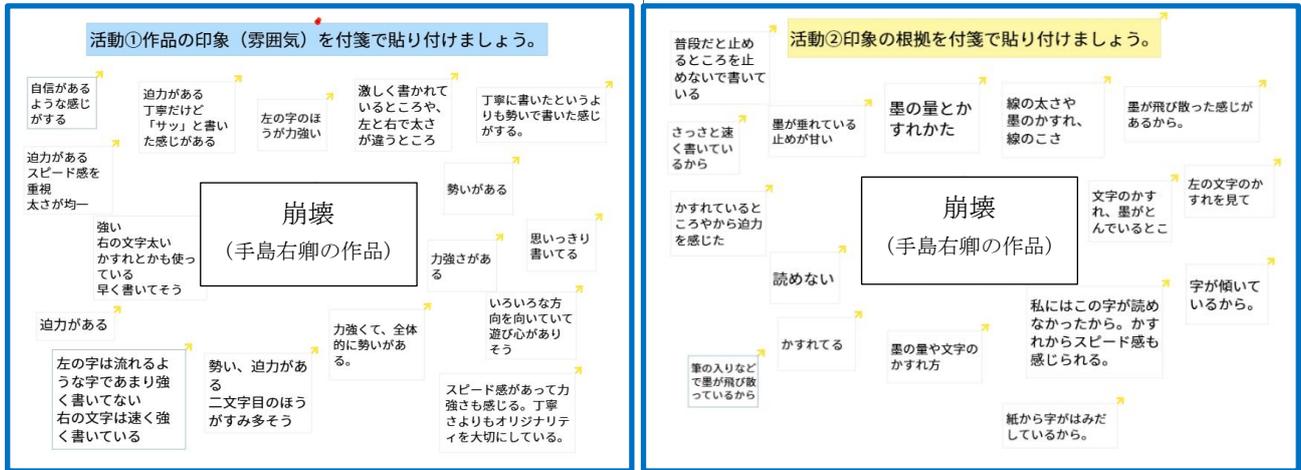


図1 生徒が入力した意見共有ノート(原文ママ)

表1 生徒の記述(一部抜粋、原文ママ)

①作品の印象(雰囲気)について	②印象の根拠
自信があるような感じがする	さっさと速く書いているから
迫力がある	墨が飛び散っているから
「サッ」と書いた感じがある	かすれているから
思いつきり書いている	紙から字がはみだしているから
丁寧さよりもオリジナリティを大切にしている	わたしにはこの字が読めなかったから
遊び心がありそう	字の向きが傾いているから

これらに基づき、書を構成する要素とは線質・字形・構成等であること、その中で今回は**ルール②**線の表現に着目するというを生徒が理解できるよう、「崩壊」の作者である手島右卿の言葉を取り上げることで、書作品における線の重要性を説明した(図2)。図2アのセリフは、右卿語録から引用した。

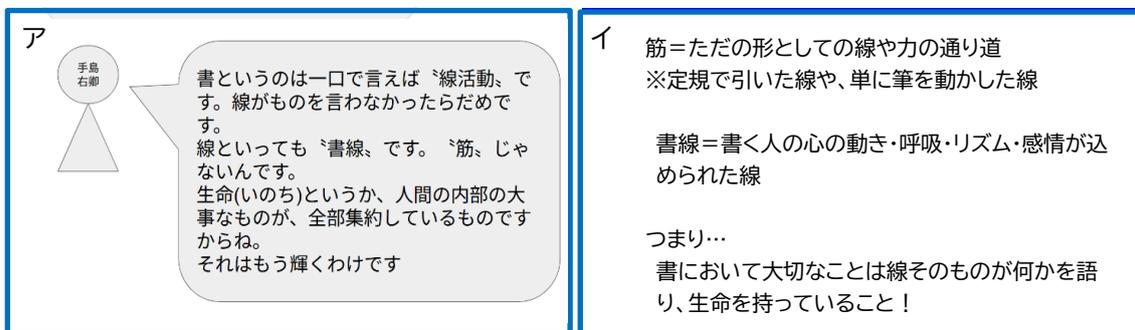


図2 授業で使用したスライド

その後グループに分かれて担当作品について鑑賞を行った。鑑賞作品は以下のとおりである。(鑑賞作品)

松井如流「円通」、上條信山「堅勁」、戸田提山「靈機」、手島右卿「愚直」

ルール①～③をロイロノートで図として作品の印象と分析項目の関連性がひとめで分かるように視覚化したことで、鑑賞作品を見るポイントを明確化でき、生徒は担当作品を積極的に鑑賞している様子が見られた(図3)。

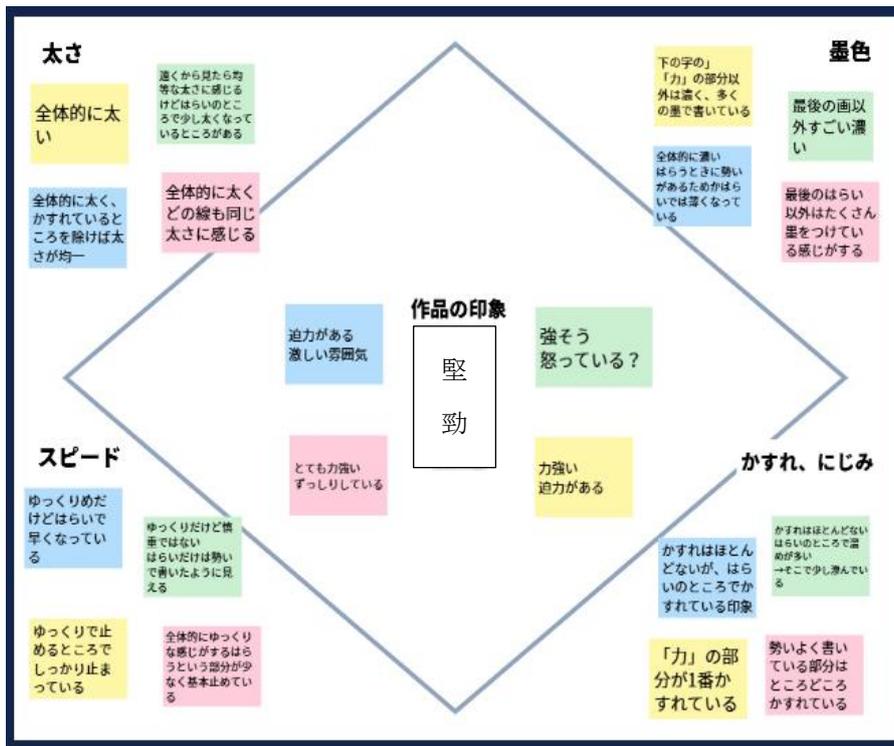


図3 生徒が入力した鑑賞カード(原文ママ)

評価規準 態②

書の美や風趣を味わい、作品や線の価値とその根拠について考えながら、鑑賞の学習活動に主体的に取り組もうとしている。

上條信山の「堅勁」を鑑賞したグループは、作品から受ける強い印象を、線が太い点、線がかすれている点、線のスピードが変化している点から力強さがあるとグループでの意見をまとめることができていた(図3)。様々な視点から線の風趣をとらえ、それらの表現効果について鑑賞できたことは成果の一つである。

また、ICTの活用は鑑賞活動において、生徒が個人の考えを深め、他者の意見を知るためのツールとして効果的であると考えられる。ロイロノートの共有ノートを活用することで、他者の意見を随時確認できるようにした。この活動は生徒が他者の考えに触れることで、新たな視点を持つきっかけとすることを目的とした。同じ意見を書いても良い活動であったが、作品の見方・考え方に正解はない、人それぞれ違って良いと繰り返し伝えたことで、自分の考えを素直に提示している姿が見られた。その際に、作品画像を拡大して細かい表現まで鑑賞している生徒の様子もあった。また、共有ノートは指導者側にも共有されるため、個人の鑑賞の進捗を確認することができた。鑑賞して感じ取ったことを言葉にする際に苦労している生徒に対して、鑑賞を言語化する上での補助となるような形容詞の一覧をその場ですぐに提示するなど、個別最適な支援が可能となった。

グループでの意見交換の後、担当作品についてグループで意見を全体に共有する時間を設定した。本研究では前述したとおり、ロイロノートを中心とした活動を行ってきた。しかし、すべてをデジタル化する必要はなく、今回の活動においては、手書きでの記述が効果的であると判断し、ワークシートを使用した(図4)。

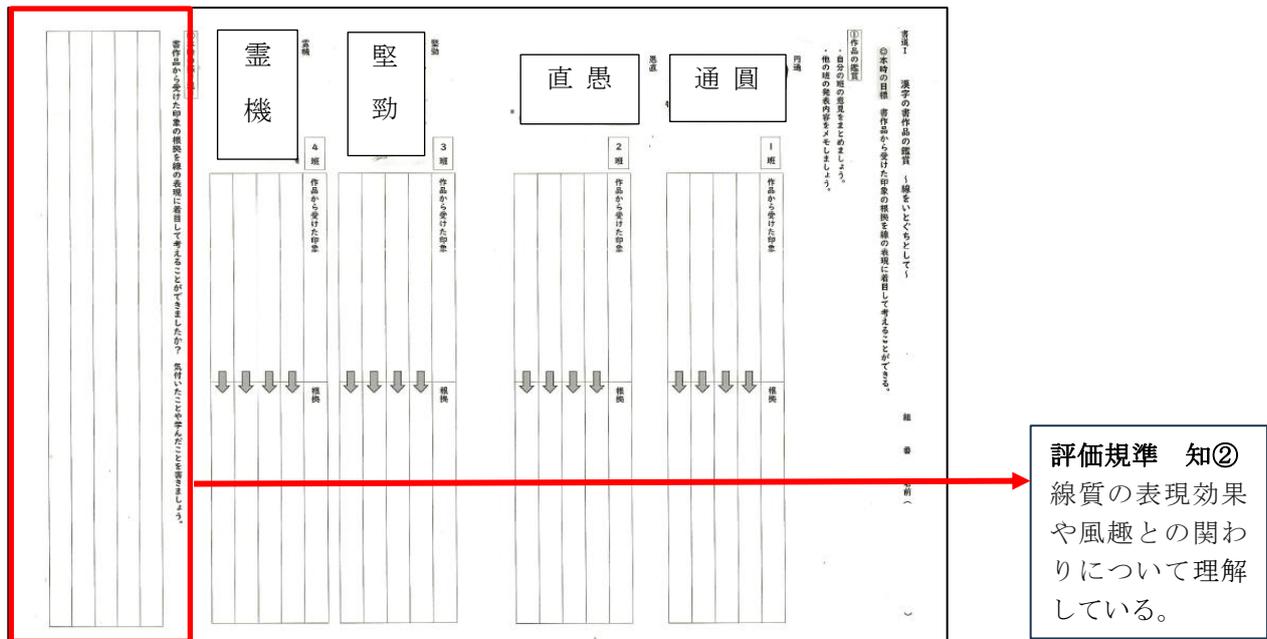


図4 実際に使用したワークシート

ワークシートを活用したことで、様々な線の表現効果を1枚にまとめることができ、作品制作時に鑑賞活動での学びを振り返る重要な材料となった。しかし、各グループで出た意見をすべて発表したため、発表時間が長くなってしまった。どの生徒の意見も大切にしたいという考えからこのような形を取ったが、限られた時間の中でより効果的な発表方法について、今後さらに工夫の余地がある。

(イ) 活動のまとめと作品制作への継続

鑑賞活動のまとめとして、本時の目標であった「書作品から受けた印象の根拠を線の表現に着目して考えることができたか」についての振り返りとした。生徒の振り返りの記述の一部を表2に示す。

表2 生徒の振り返り(一部抜粋、原文ママ)

生徒㉗	線はいろいろな書き方ができて、細いと弱い感じ、太いと強い感じ、かすれや止めがしっかりしている字は強く、あまり強弱がないと弱いなど、表現のしかたがたくさんあることを知った。
生徒㉘	筆で書いたことには変わらないのに、筆の入り方や置き方、放し方、墨の濃さで、作品に対する印象ががらりと変わってびっくりした。
生徒㉙	読めなかったり、言葉の意味がわからなくても、線の書き方や太さ、墨の使い方、怖い、強い、明るい、弱いなどの雰囲気分かるので、どんな意味か想像することができておもしろさが分かった。

表2の記述より、作品の印象と線の表現効果を関連付けている様子が見られる。全体→個人→グループ→全体と段階的な鑑賞の授業展開が、生徒の作品の見方・考え方を深めることに効果的であったと考える。これまでの授業での鑑賞活動では「かっこいい、かわいい」や「字のバランスがいい」など曖昧なコメントや造形性に偏ったコメントが目立っていた。また、表現活動においても字形にばかり着目している生徒が多かった。しかし今回の鑑賞活動では、見る視点を線の四つの分析項目に絞ったことで、なぜそう感じたのかという根拠を個人で言語化し、説得力のある鑑賞活動を行うことができた。公開研究授業以降の作品制作においても、これらの鑑賞活動での学びを生かし線質にこだわった作品を仕上げる事ができた。

イ 目標に準拠した評価の工夫

本単元では、指導と評価の一体化を実現するため、鑑賞活動で生徒が身に付けた線の表現効果が、自身の作品の目標設定(作品構想)に、どのように結び付いたかを評価の焦点とした。生徒の学習の変容を、以下の三つの段階で評価を行った。

(7) 鑑賞活動のワークシートの振り返りから見取る評価

鑑賞活動(1・2時間目)では、鑑賞シートを「どのような印象か」と「どのような線だからか」の2項目と、線の分析項目を四つに絞り生徒の思考のプロセスを可視化することで、評価を行った。生徒の振り返りの内容から、書作品から受けた印象の根拠を線の表現に着目して考えることが達成されているかを評価の要点とし、次時(再制作の構想)への橋渡しとした。

(イ) 作品の変容(再制作の構想と清書)に見る評価

鑑賞活動で得た学びを、4月に制作した一字書の再制作の構想と清書に生かしているかを見取った。線の具体的な要点を表現意図と結びつけた目標設定がなされているかを評価の要点とした。また、清書作品において、構想した線の表現、例えば、筆を側面に倒して太く書く、早く書いたかすれではなく意図的にかすれを出す、などが用筆・運筆の技能として体現されているかを見取った。

(ウ) 4次(鑑賞活動・振り返り)における評価

4次の鑑賞活動では、制作者は発表シートを用い、①自分の作品においてどのように表現したかったか(表現意図)、②それを表現するためにどのような線の工夫をしたか(線の根拠)を、他者に明確に伝えた。この発表内容から、生徒が1・2次で学んだ線と効果の関連性という知識を、自己の作品を論理的に説明し、他者に伝える能力として応用できているかを評価した。また、他者の作品鑑賞及び振り返りの内容から、鑑賞した作品や自己の制作経験を通して、生徒が単元全体の学習内容を統合し、書作品のよさや美しさを、線の要素という具体的な根拠に基づいて判断できる力が向上しているかを評価した。

ウ 公開研究授業後の展開

公開研究授業後は、4月に制作した「自分を書で表現する」をテーマとした一字書を、鑑賞での学びを生かしさらに良い作品になるよう再制作に向けて授業を展開した。

まず2次は、前時に鑑賞した作品の中に淡墨の作品があったため、淡墨の作り方を伝えるとともに、墨の濃さや起筆、速度、傾きでの線質の違いを学ぶ授業を行った。生徒は、自身の作品の再制作の構想に生かせるような線を各自追究しながら意欲的に取り組んでいた。

3次はロイロノートで作品の再制作の構想を立てた(図5)。

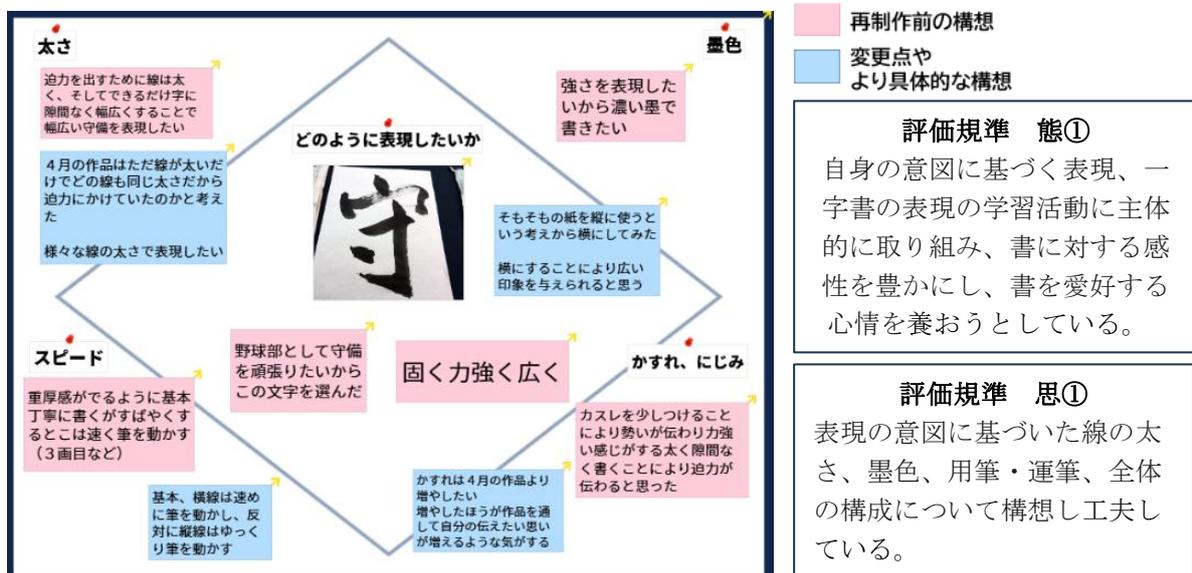


図5 生徒の作品の構想例(原文ママ)

これは、1次の鑑賞活動で使用した構図と同じものである。そのため生徒も悩むことなく、分析項目を再確認しながらスムーズに活動に取り組んでいる様子が見られた。また、制作を進めるにあたって、変更点が出てよいとした。再制作前の構想と、制作するにあたっての変更点やより具体化した構想を付箋の色を変え記入させることで、指導者が作品の完成に向けた経過や変容を丁寧に見取ることができた。

図5の生徒は、強さを表現するためには、線を太くすればよいという考えから、線の太細の変化や勢い、筆の入り方や線の角度でも強さを表現できると自ら導くことで主体的な学びが実現できたといえる。

また、制作していく上で半紙の向きを変えたことが効果的であったとも述べている。この気付きは、書を構成する要素である字形・構成との関連や働きまで学びを広げることができたといえる。このような生徒の良い気付きは、指導者が全体で丁寧に共有し、クラス全体への学びとすることが重要であると考えられる。

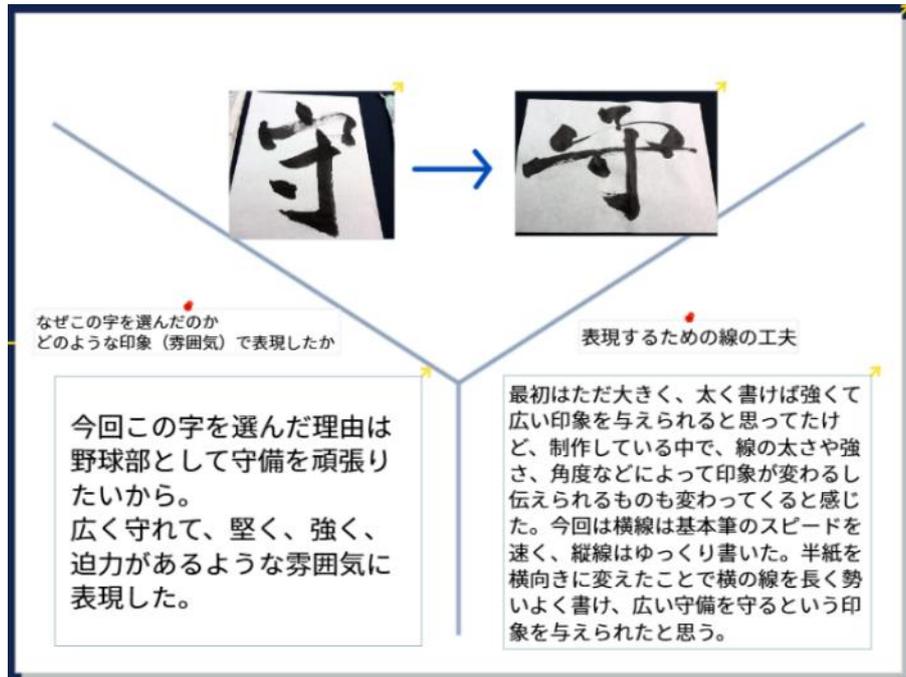


図6 生徒の発表シート例(原文ママ)

続いて4次には、前時の構想と完成した作品を基に、発表シートの作成を行った(図6)。その後、通常であれば制作者の発表を聞いたうえで鑑賞を行うことが多いがあえて今回は制作者の発表を聞く前に他者の作品について鑑賞を行った(図7)。また、図7のうち生徒の記述を一部抜粋する(表3)。

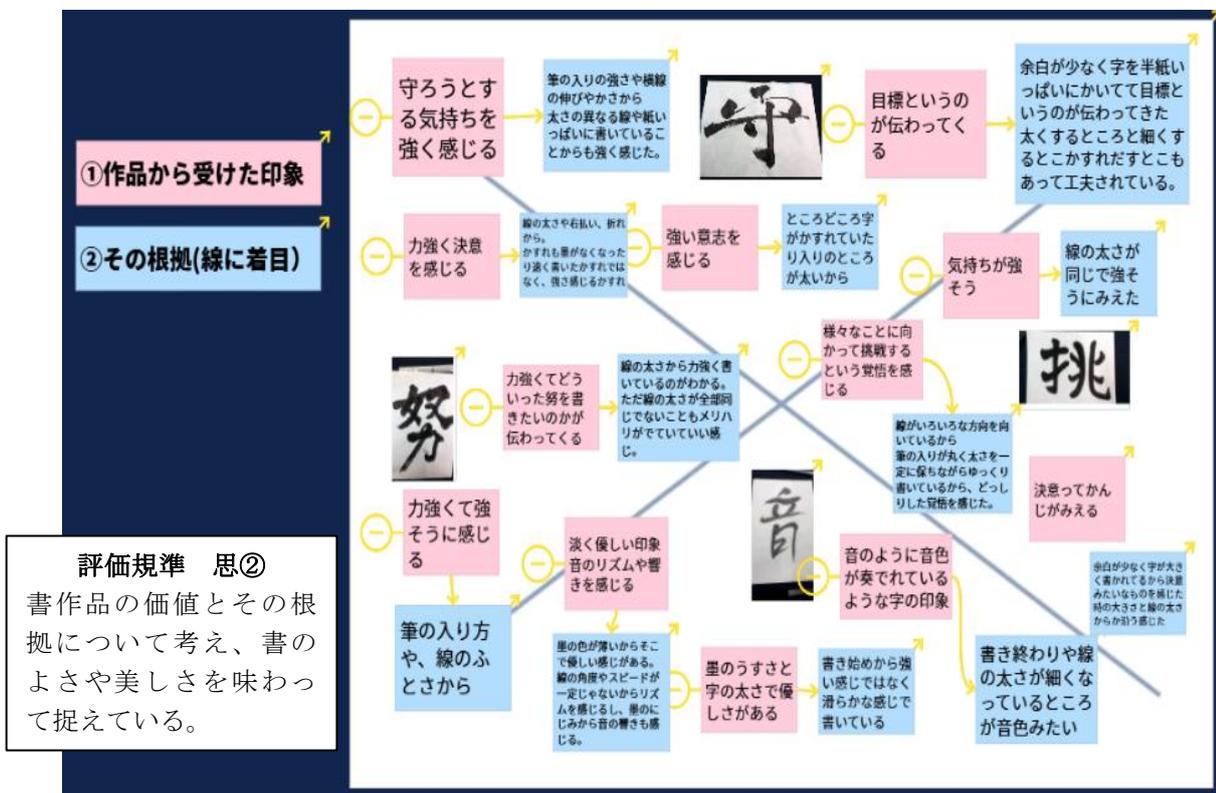


図7 他者の作品鑑賞(原文ママ)

表3 生徒の記述(一部抜粋、原文ママ)

①作品の印象(雰囲気)について	②印象の根拠
守ろうとしている気持ちを強く感じる	筆の入りの強さや横線の伸びやかさから太さの異なる線や紙いっぱいに行っていることから強く感じた。
力強く決意を感じる	線の太さや右払い、折れから。かすれも墨がなくなったかすれや速く書いたかすれではなく、強さを感じるかすれ。
淡く優しい印象 音のリズムや響きを感じる。	墨の色が薄いから優しく感じる。線の角度やスピードが一定じゃないからリズムを感じるし、墨のにじみから音の響きも感じる。

制作者の説明を聞く前に鑑賞活動を取り入れることで、制作者の意見に沿った鑑賞ばかりになることを避け、柔軟な見方で鑑賞を行うことができるようにした。その結果、様々な視点から鑑賞し具体的に言語化できており、生徒の作品に対する見方・考え方を広げることができた(表3)。この際指導者が、自分の作品に込めた思いと、他者から見た印象が異なっていたとしても「それは新しい発見・視点として前向きに捉えよう」と声掛けを行ったことで、活発に話し合い、質の高い意見交換を行うことができた。実際に、「他者との鑑賞活動を通し感じたこと、考えたこと」という生徒の振り返りには、「ひとつの意見として他者の意見を大切にしていきたい」、「考え方が違って面白かった」というような前向きな記述が多く見られた。

最後に自身の作品について発表シートを活用し発表を行った。生徒が粘り強く課題に取り組み、自分のよりよい表現を達成することができた。以下は生徒が制作した作品の事例である(図8)。また、最後の振り返り「線にこだわり作品制作をして感じたこと、考えたこと」についての生徒の記述を表4に示す。

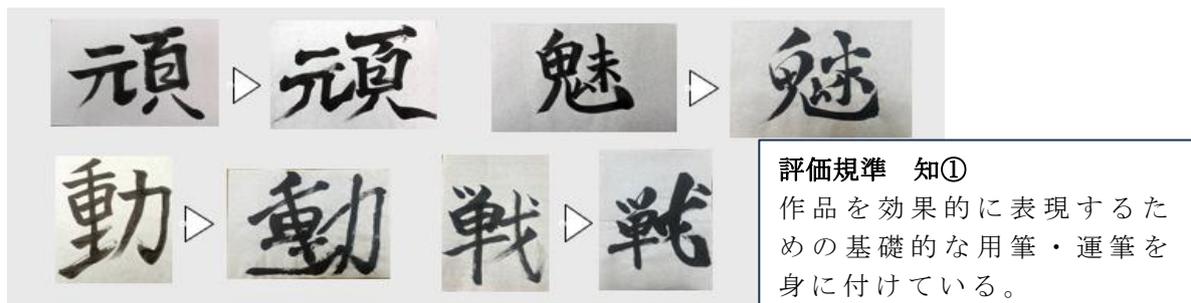


図8 生徒作品の変容例

表4 生徒の振り返り(一部抜粋、原文ママ)

生徒㊦	自分がこれまで思っていたより自由自在に表現できるとわかった。線の少しの変化でも印象が変わることが不思議で面白いと感じた。
生徒㊧	実際に線に工夫して自分で作品を書いたからこそ、これからいろいろな作品を鑑賞する時は、はじめの時よりも幅広く想像しながら鑑賞できるんじゃないかなと思った。
生徒㊨	自分の作品を見る人にどう伝わってほしいか、たくさん悩んで難しかったけど、だんだん自分のその字に込めたい思いを線で工夫することができて達成感があった。

エ 鑑賞を主とした今後の展望

鑑賞活動において何よりも重要なことは扱う作品の選定である。鑑賞のねらいによって扱う作品が大きく変わってくるためである。例えば本研究授業のように、線の表現のみに着目させることを目指すのであれば、生徒が文字の意味を判読しにくい象形文字や金文、あるいは草書体をあえて扱うことも考え

られる。これにより、生徒は線から受ける印象や風趣の分析に集中でき本単元の目標である「線に着目した鑑賞力」の育成ができる。一方、言葉の意味や作品背景と表現の関連性を問う場合、線質に加え、同じ時代に制作された作品に絞り、作品背景の学びを取り入れた授業展開も必要となってくる。

このように、今後も鑑賞の目的と生徒の習熟度に応じた作品選定のあり方を明確化し、段階的な授業展開を行うことで、生徒の書の見方・考え方を深化させ、指導と評価の一体化の継続的な推進を目指していきたい。

引用文献

手島右卿 『右卿語録』公益財団法人 独立書人団

<https://www.dokuritsu.or.jp/shoukai/teshimayuhkei/> (2026年2月17日取得)